

特集 OCD の病態仮説と治療理論

OCD の病態仮説と治療理論

中尾 智博

強迫性障害 (Obsessive-compulsive disorder; OCD) は、その病態仮説と治療理論に関して1990年代以降に多くの知見が得られた。治療に関して、早期からOCDに対する有効性が確立していた行動療法は、近年新しいパッケージ治療を取り入れ、また認知療法や他の新しい心理療法にも多大な影響を与えながら発展が続いている。そして薬物療法におけるSSRIの登場は、OCDの治療戦略を大きく塗り替えるものであった。最近では非定型抗精神病薬によるSSRIの強化療法に大きな注目が集まっている。

一方、これらの治療法とともにOCDの病態を解明する試みが、画像研究をはじめとする、進展著しい生物学的研究手法を用いて行われている。このような状況をふまえ、本シンポジウムでは行動療法・薬物療法・生物学的研究各領域の最前線で活躍するOCDを専門とする臨床家・研究者に依頼し、OCDの病態仮説と治療理論について最新の知見を交えながら発表と討論を行ってもらった。

飯倉先生にはOCDの行動療法について、その中心的な治療技法であるERP (曝露反応妨害法) を主たるテーマとして講演していただいた。ERPは全てのOCD患者に有効というわけではなく、導入に際して詳細な行動分析を行う必要があること、さらにその有効性を高めるためには、ERPを行いにくくしている要因を分析し対応をとる必要があることが示された。

次に岡本先生には、OCDの薬物療法について、臨床薬理、基礎薬理の知見を中心に紹介していただき、SSRIの有効性と作用機序について話していただいた。さらに、OCDに関する代表的な病態仮説である前頭葉-皮質下回路仮説 (OCD-loop) と報酬系、価値評価との関連について、セロトニン・ドパミンによる調節を中心に神経化学的な側面から解説してもらった。

松本先生にはOCDの脳画像研究について、OCD-loopが構築される礎となったPET・SPECT研究や、VBMによる脳構造解析や拡散テンソル画像などの最新の研究報告を、自験例も交えながら示していただいた。OCDの脳病態に関してこれまで議論の中心であった前頭眼窩面、線条体、視床といった部位に加え、帯状回や島皮質に関する新しい所見が持つ意味についても言及がなされた。

清水先生には脳生理研究の領域からの発表をしていただいた。恐怖条件付けにおける反応を事象関連電位によって調べ、恐怖消去期の聴性誘発電位P50がOCD患者では健常者に比べ有意に遷延することを見出し、感覚ゲート機構に障害が生じている可能性を示した。また、曝露療法における恐怖の消去は、この感覚ゲート機構の修復と関連するのではないかと仮説を示された。

最後の演者は、本シンポジウムを企画した著者がつとめた。行動療法、薬物療法による脳機能の変化について、fMRIの所見を中心に示し、

OCD-loop や OCD の異種性との関連も示しながら発表を行った。有効な治療は OCD-loop を構成する各脳部位にも機能変化をもたらし、それを画像で捉えることは OCD の病態の解明、治療法の発展にも有用であることを示した。

生物学的精神医学が隆盛の今、OCD は特に生物学的基盤の強い疾患として注目される研究対象であり、今回のシンポジウムでも OCD-loop モデルをはじめとする脳病態仮説が中心的なテーマとなった。しかし、これらの仮説が生物学的精神医学の研究領域のみに限局されては、その存在意義は薄らいでしまう。神経伝達物質とその伝達によって生じる局所脳活動の探索を基点に、注意や記憶といった高次認知機能、不安や恐怖、強迫と

いった心理機能までも説明可能な、つまり脳とこころの関係を明らかにするような脳病態仮説が今後求められるであろう。

今回のシンポジウムでは、行動療法と薬物療法の領域からの臨床的な知見・仮説と、神経画像・神経化学・神経生理の領域からの知見・仮説を結びつけることにより、OCD の病態をかなり明確に示すことができたのではないかと考えている。当日の会場は非常に熱気があり、各演者の先生も大変明快に各領域の知見を示してくれた。熱気の余り合同討論の時間が取れなくなってしまったが、今回の論文集を通読していただくことで、OCD の病態に関する最先端の知見・仮説を理解していただけたと思う。